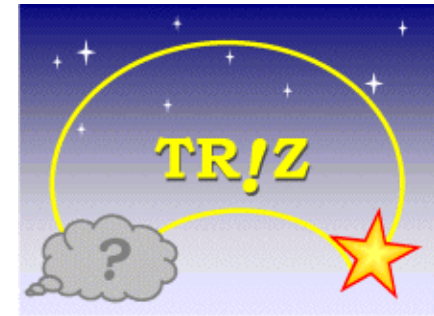


第12回 日本TRIZシンポジウム 2016

2016年9月1日(木)～2日(金)

早稲田大学西早稲田キャンパス (東京・新宿区)

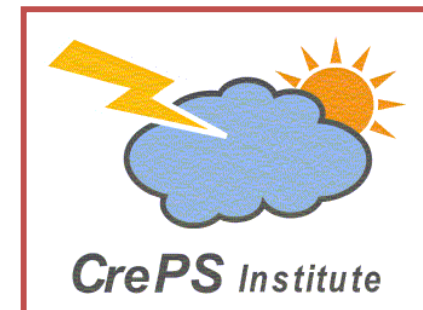


**社会の貧困の問題に  
TRIZ／CrePSでアプローチする：  
人々の議論の根底に、  
人類文化の主要矛盾「自由 vs. 愛」を見出した**

2016年 9月 1日

中川 徹

(大阪学院大学 & クレプス研究所)



## はじめに : (趣旨とアウトライン)

本研究は、輻輳した社会的な問題に、  
TRIZ／CrePSを使ってアプローチした最初の報告です。

- (1) 「創造的な問題解決のための一般的な方法論(CrePS)」を作った。  
TRIZをはじめ、各種の創造性技法、問題解決技法を統合するもの。  
技術分野、ビジネス分野などに限らず、一般的に使える。  
「6箱方式」を基本パラダイムとする。

実際の社会的な問題に適用する方法を模索した。

社会的問題は技術的問題よりも、輻輳した大きな問題である。  
非専門家／素人である自分がどのように、取り組めばよいか？

まず、一つのテーマを選んで、問題の状況を知りたい。

- (2) 「日本社会の貧困」を大きなテーマに選んだ。  
最初は、「高齢者の貧困」をテーマとした。  
藤田孝典著『下流老人――億総老後崩壊の衝撃』をテキストとした。  
(実地調査や多数の文献調査の代替にした)

**(3) 『下流老人』の本の論旨を「見える化」(図示)した。**

「札寄せツール」(片平彰裕作)を使い、Excel上で図示した。  
各章を2~5頁の図にする。親和図法(KJ法)と同様の図解を作る。  
24頁の図解冊子を作った。(一般の社会人にも見せた。)  
多様な論点での問題の現状、背景、しくみ、提案などを知る。  
全貌 および 多様な問題の状況を理解するのに役立った。

**(4) Amazonサイトでの、同書に対するカスタマーレビュー82件を検討した。**

高評価も多いが、低評価(酷評)も多く、両極端に分かれる。  
低評価のものは、書評の質は高くないが、生の声・感情が出ている。

この書評の二極化は、貧困や福祉に関する国民の意識の対立を示す。  
この意識の対立が、社会問題における人々の意見の対立(すなわち、  
諸政策に対する意見の対立)の根底にある、と認識した。

**日本社会の貧困、高齢者の貧困に関して、多数の問題点がある中で、  
この「人々の意識の対立」が根源的な問題点である、と判断した。**

これを、中心テーマに選定した。

(5) 本件の中心テーマを設定する:

「(貧困と福祉などの)社会問題の根底にある、  
人々の意識の対立の根源を知り、  
その根源的対立を解決する方策を考えて、  
社会問題を解決する方向性を見出す。」

意識の対立は、

競争社会における「勝ち負け」と「助け合い」の対立に起因する。

この意識の根源を考察した。

(6) 根源には、「自由」と「愛」の葛藤・対立(=矛盾)がある、と認識した。

「自由」= 自分で判断・行動し、「生きる」こと。 人類文化の第一原理。

「愛」 = 子を愛し、家族を愛し、隣人を愛して、「助け、守る」こと。

人類文化の第二原理。

「自由」と「自由」、「愛」と「愛」、「自由」と「愛」が対立する。

==> 「自由」 vs. 「愛」 を 「人類文化の主要矛盾」と名付けた。

両者を支え、動機づけ、調整するもの ==> 「倫理」(人の道、「良心」)

人類文化は、「自由」の伸長と、「愛」の普遍化を目指して、発展してきた。

さまざまな社会組織、社会システムを形成した。

(経済、政治、・・・)

高度な文化を生んだ。

(言語、宗教、社会思想、科学技術、芸術、・・・)

「自由」vs.「愛」の「主要矛盾」は、歴史を通じて解決されてきているか？

==> NO. (解決する考え方・事例はあっても)

「主要矛盾」は至るところに在り、生まれ、深刻化している。

(7) なぜ、「主要矛盾」の解決が困難なのか？ ==>主要課題 4つ

- (a) 最も基本の個人(間) のレベルで、「自由」、「愛」、「倫理」のありがたが明確でない。人間性における「欲」「悪」「(原)罪」の問題も。
- (b) 多様で、多層の、種々の社会組織における、「自由」、「愛」、「倫理」のありがたが明確でない。理解が世界的に共有されていない。
- (c) 個人や組織が自己の利害(「自由」)を主張して、(社会的)「倫理」に反する行動をとり、社会的な「勝者」になって、社会システムを作ること。
- (d) (c)の状況が、小さいものから大きなものまで至る所にあり、かつ、歴史的な積み重ねをもっていること。

**(8) 今後すべきこと:**

上記(7)の (a)  $\Rightarrow$  (b)  $\Rightarrow$  (c)  $\Rightarrow$  (d) の順に考察を進める。

特に(a) 個人(間)のレベルでの考察が大事。

非常に大きな問題である。

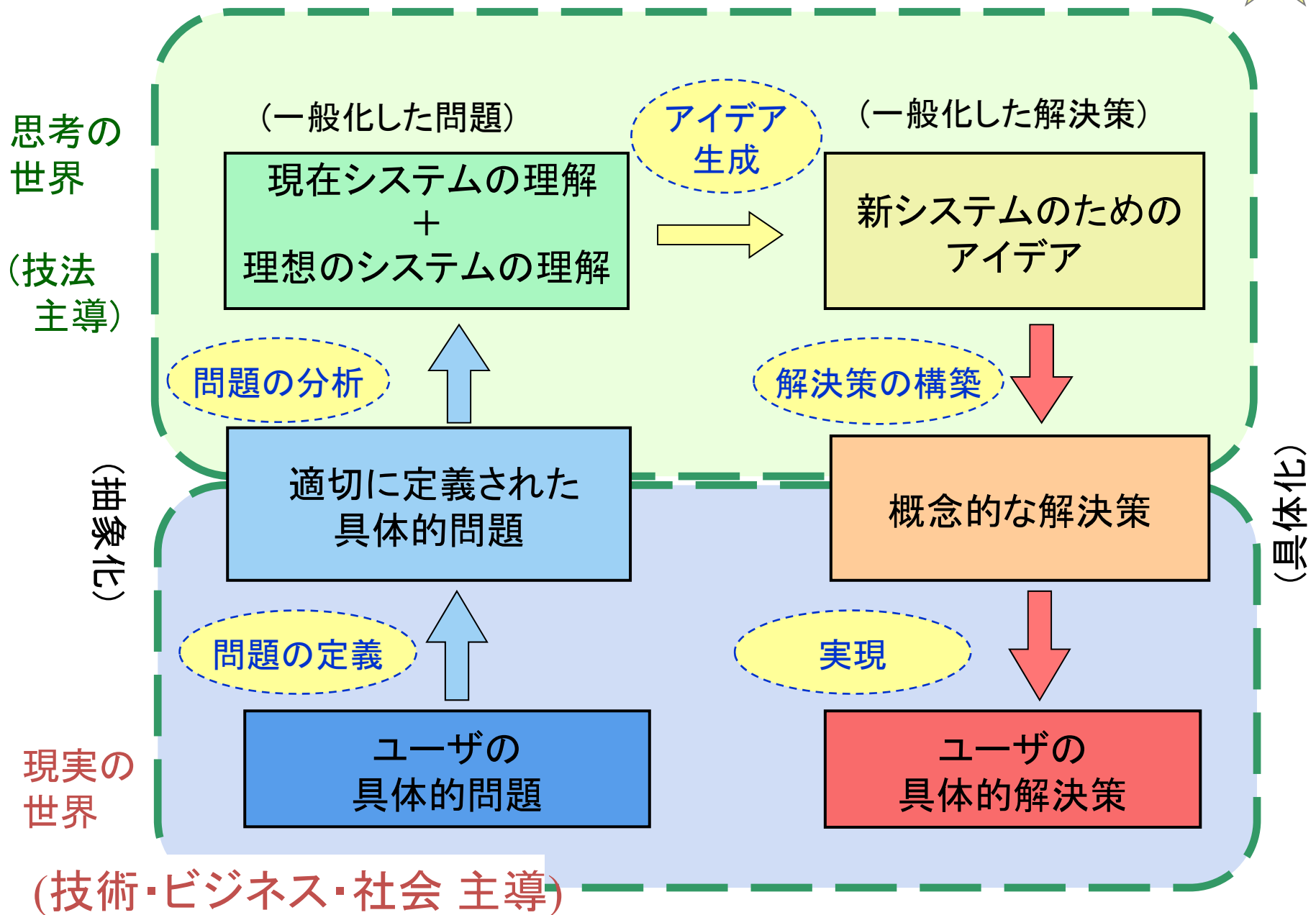
前途遼遠であるが、

それを考察すると、将来の、広範囲の問題に指針を与える。

本件は、「矛盾を認識し、その解決を図る」というTRIZの思想が活用された。

考察の過程は CrePS の考え方でガイドされている。

# 創造的問題解決の新しいパラダイム (CrePSの「6箱方式」)





TRIZ を再考して得られた、  
より高いレベルの新しい目標（2012年 5月、中川 徹）

より高い新しい目標：

創造的な問題解決と課題達成のための、  
一般的な方法論を確立し、

それを広く普及させて、

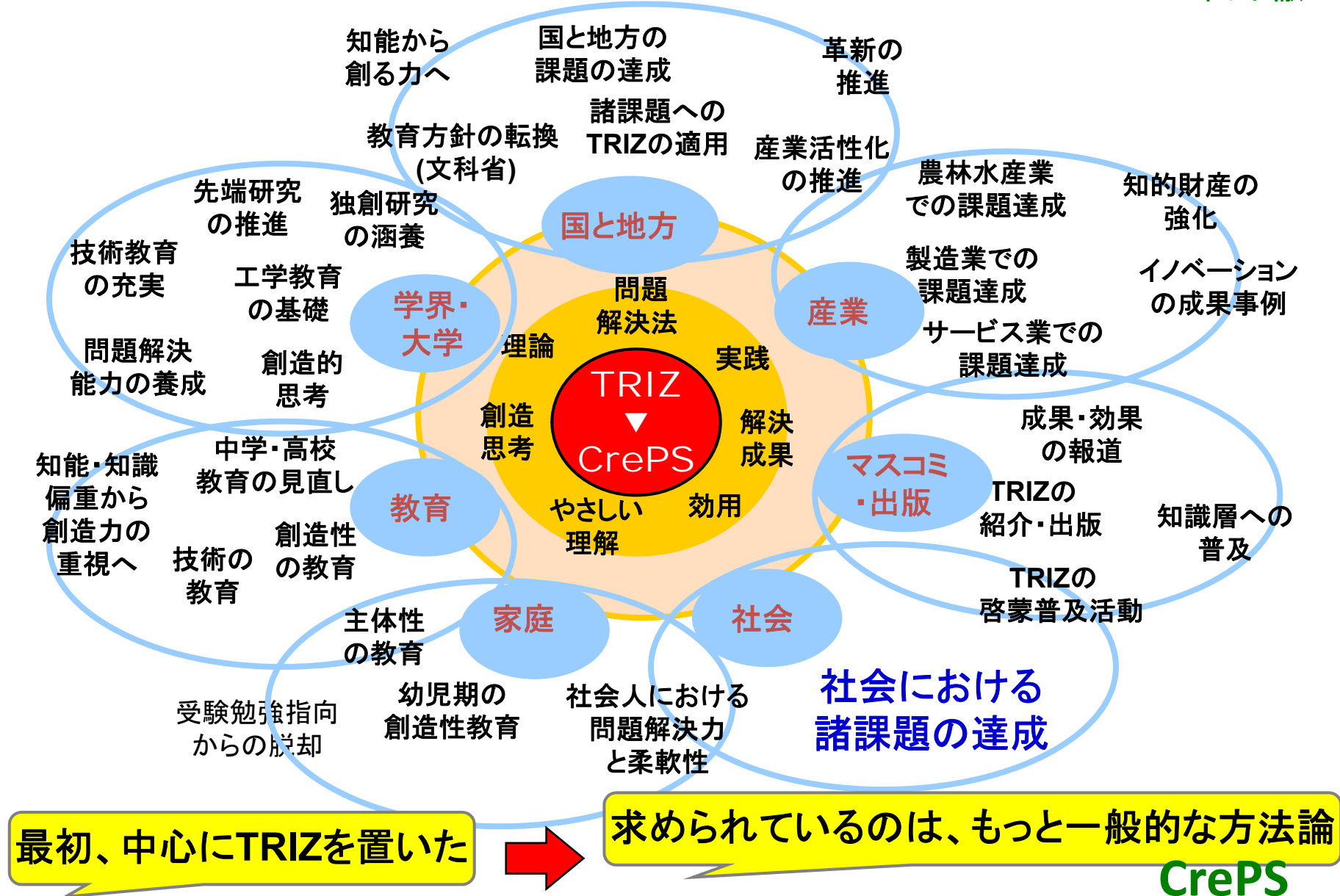
国内の（そして世界中の）さまざまな領域での  
問題解決と課題達成の仕事に それを適用する。

この方法論の略称を CrePS（クレプス）と決めた（2013年 4月）

# 「創造的な問題解決の方法」の適用が望まれる さまざまな領域



2012.5 中川 徹



# TRIZ/CrePS を 実際の社会的問題に適用する

社会的問題は技術的問題よりも、輻輳した大きな問題である。

いままでに沢山の政治家・実業家・専門家が取り組んできた。

非専門家／素人である自分がどのように、取り組めばよいか？

まず、一つのテーマを選んで、問題の状況を知ることから始める。

まず最初に、高齢者の貧困をテーマに取り上げた。  
そして、それが「日本社会の貧困」という  
テーマの一部であると認識した。

藤田孝典著『下流老人』を テキストに選んだ。  
(二度精読したのちに 選んだ)  
(実地調査や多数の文献調査の代替にした)

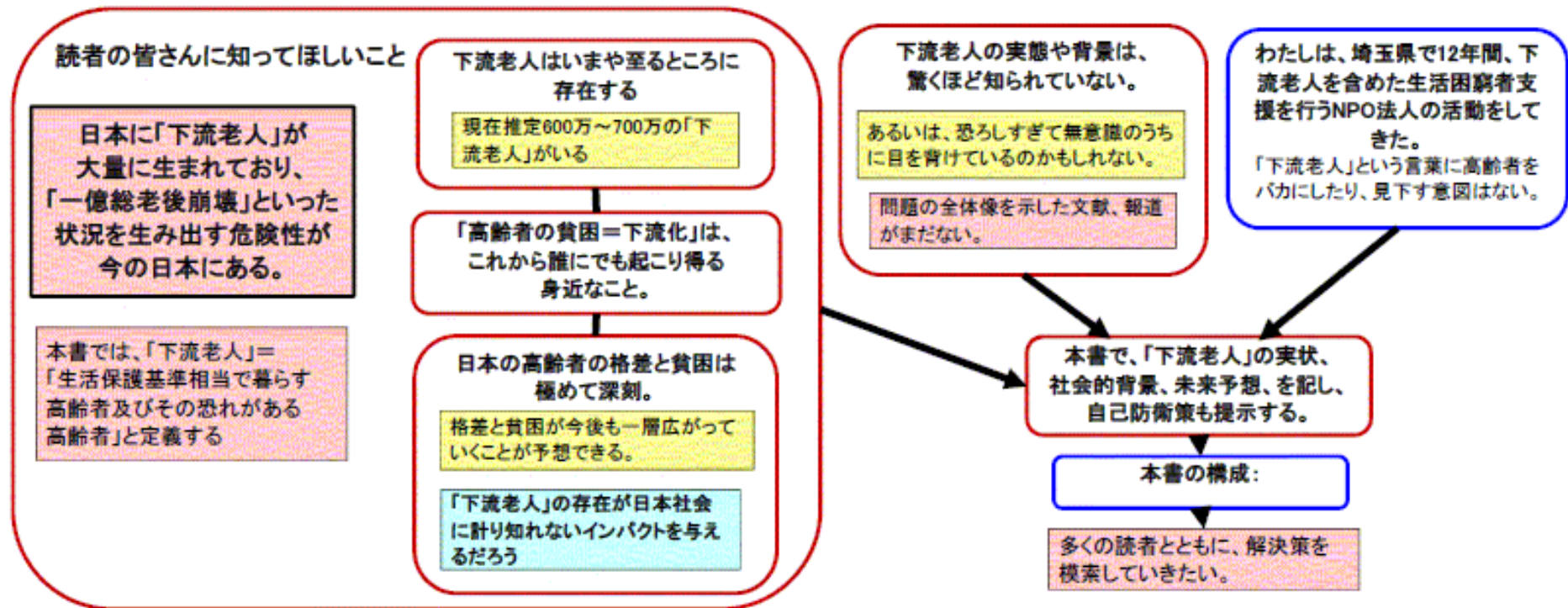
その論旨を「見える化」した。  
24頁の冊子を作った。



# 「見える化」した例: 『下流老人』(藤田孝則著)の「はじめに」

『下流老人:一億総老後崩壊の衝撃』 藤田孝典 (朝日新書、2015. 6.30) (0) 「はじめに」

「その論点のまとめと可視化 (「札寄せツール」による図示)」 (中川 徹、2015. 9. 2) 「見える化」した要約版 (2015. 9.11)



『TRIZホームページ』(編集: 中川 徹)に掲載 (2015. 9.17)

<http://www.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/>



## 「見える化」した方法（「札寄せツール」を使った）

- (1) まず全体を読んで理解する。
- (2) 初めから、文の大事なところ、要点を押さえて、書き出す。
- (3) 以下、「札寄せツール」(片平彰裕作)という Excel ソフトを使って、  
抜き書きした各文を、ラベルにして、配置しやすくする
- (4) 論理的に関連したものをグループ化し、その主文を選ぶ／書き出す。  
グループ内の順番を整理する。
- (5) グループごとの全体的な配置を整え、全体の論理を明確にする。
- (6) グループを枠で囲み、ラベル間やグループ間の関係を矢印などで、示す。  
配色、太字などを使って、見やすくする。
- (7) 不必要な詳細を削り、不足を補って、全体の論理を明確に示す。
- (8) 出来上がった図の論理を、改めて簡潔な文章にする。

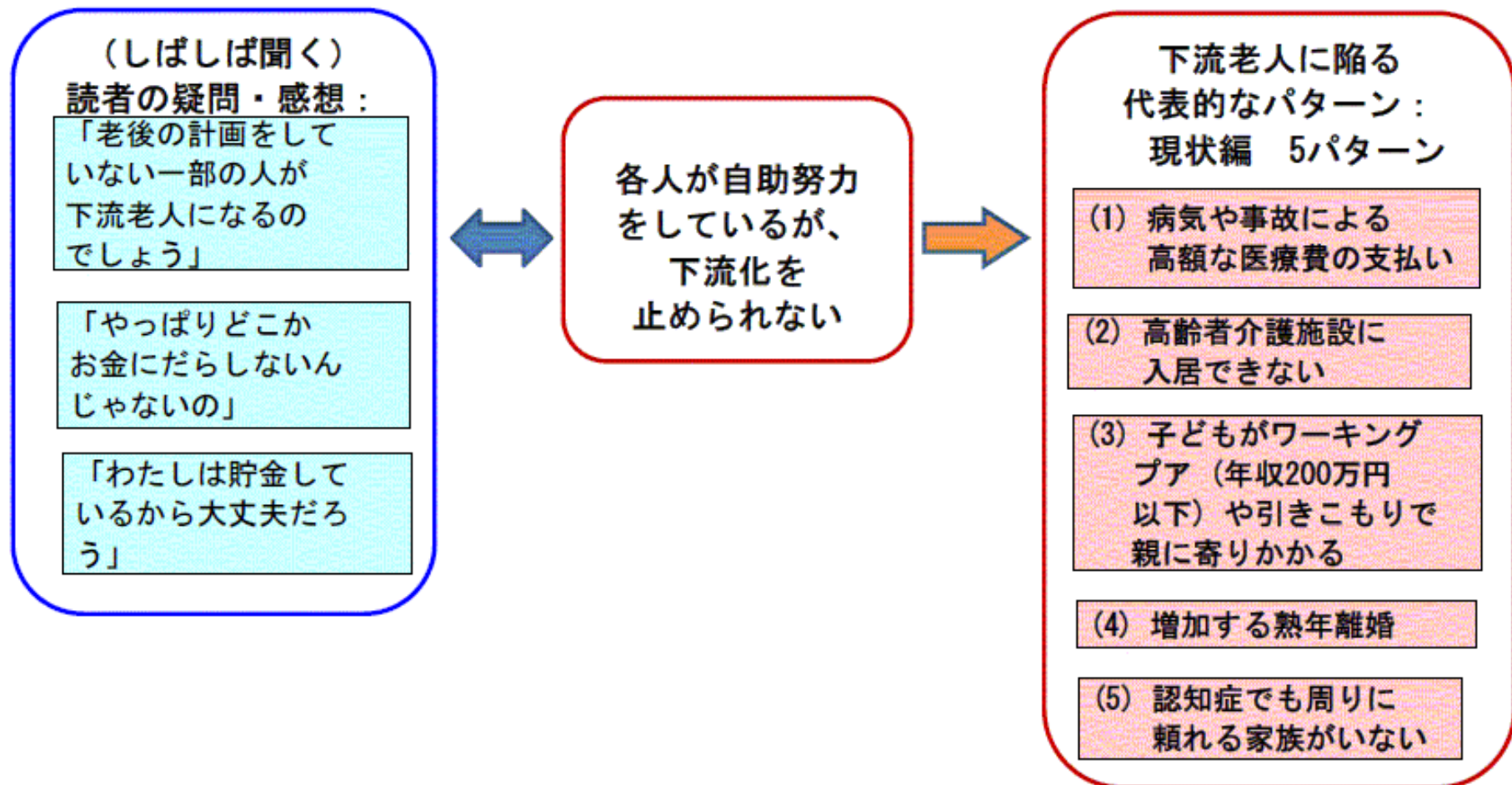




原典： 藤田孝典著『下流老人』 「第3章 誰もがなり得る下流老人ー  
「普通」から「下流」への典型パターン」 pp. 75 - 124

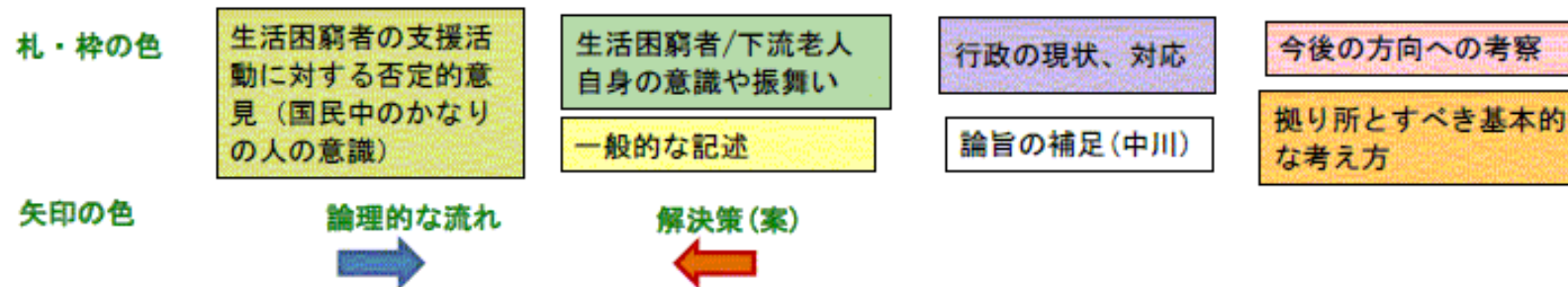
論点の可視化（「札寄せツール」による図示）（中川 徹） 『TRIZホームページ』掲載 2015.10.18

(3) 誰もがなり得る下流老人 (3A) 現状編 (その1)

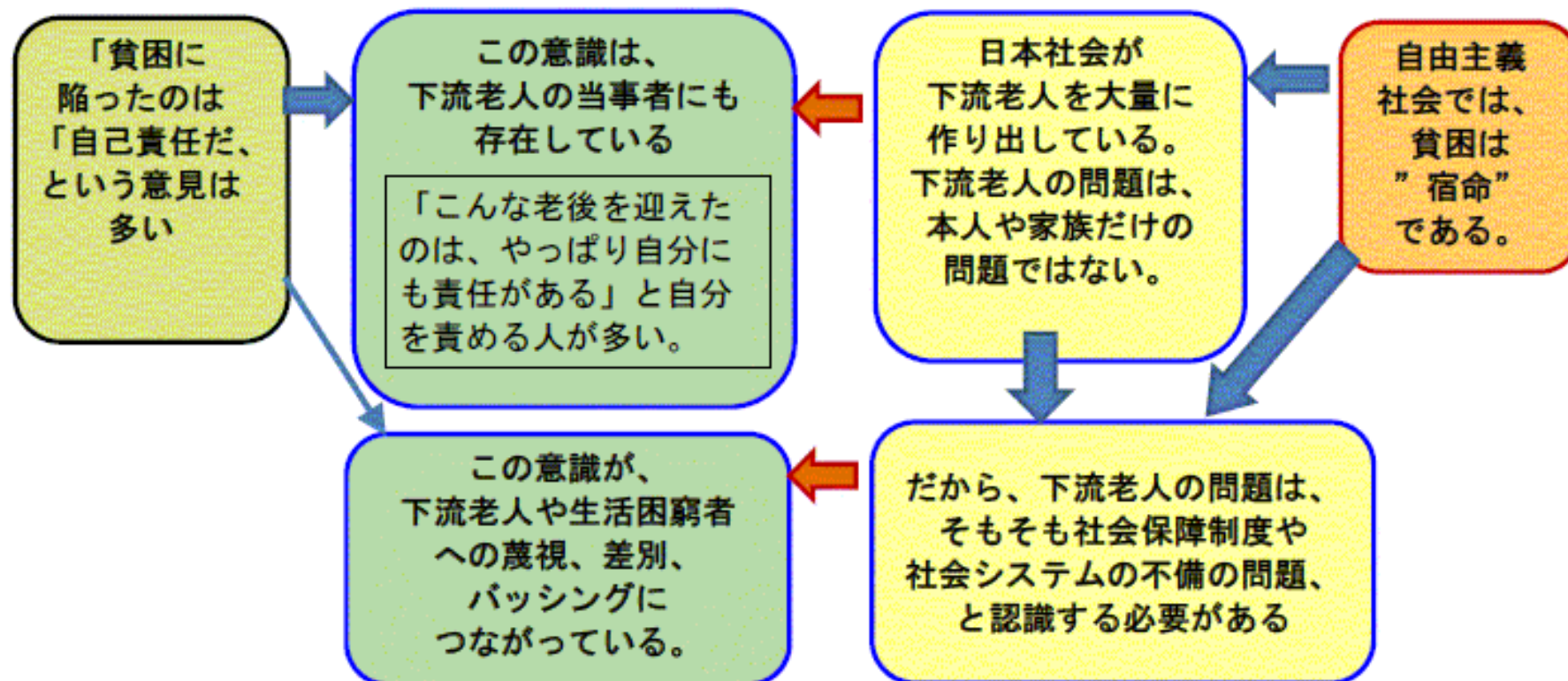




注： この章は、いろいろな立場の人たちの議論を扱っています。下記のように、立場を表現します。(中川)



### [3] 貧困は自己責任か？—貧困が起きることは、自由主義社会の宿命である

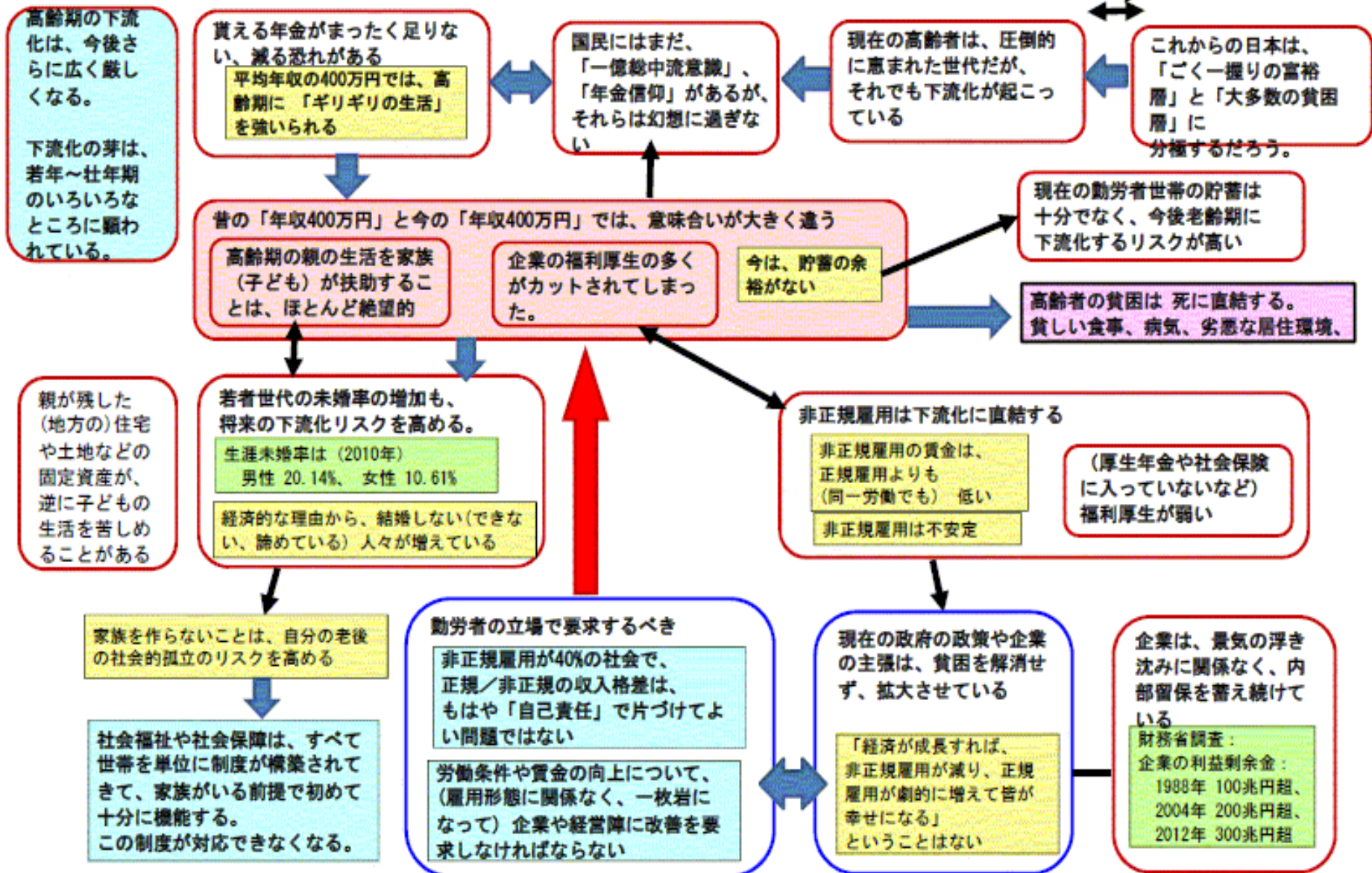






原典：藤田孝典著『下流老人』「第3章 誰もがなり得る下流老人ー「普通」から「下流」への典型パターン」pp. 75-124

論点の可視化（「札寄せツール」による図示）（中川 徹3）誰もがなり得る下流老人(3B) 近い未来編





原典：『下流老人』(藤田孝典著)  
「第7章 一億総老後崩壊を防ぐために」(最終章)



「見える化」ノート、(7) 政策の検討と提言 (文章化したまとめ)  
中川 徹、2016年 1月 5日

著者(藤田孝典氏)が本書最終章に記述している提言(とその論理)をまとめて文章化すると、以下のようです。「要約版」の図を見ながら、さらに簡単にしています。  
「状況・考察==>提言」の形式で表現しました。

- (1) いま、「下流老人」(生活保護基準相当で暮らす高齢者)が大量に生まれており、約6～7百万人と推定される。  
また、若者の雇用や生活環境が急速に劣化し(非正規雇用やワーキングプアなど)、低所得化が進行している。  
下流老人の貧困だけでなく、若年層の貧困、子どもの貧困などが広く存在し、それらが連鎖して、日本社会全体の貧困が進んでいることが、問題なのである。  
これらの下流老人やワーキングプアの若者たちを生み出すのは、国であり、社会システムである(当人個人だけの問題ではない)。

==> **国や政府が、日本に貧困が広がり、進行しつつあることを認め、格差是正や貧困対策を本格的に打ち出すことが、何よりも必要である。**

『下流老人』(藤田孝典著)「見える化」ノート、  
(7) 政策の検討と提言 (文章化したまとめ) 中川 徹、2016年 1月 5日



- (1) 国や政府が、日本に貧困が広がり、進行しつつあることを認め、格差是正や貧困対策を本格的に打ち出すことが、何よりも必要である。
- (2) 上記の基本理念のもとに、「**貧困対策基本法**」を法制化し、国民の貧困化を予防し、貧困から救済するための方策を、国家の重要戦略として建てるべきである。
- (3) 政府や自治体はまず、(下流老人に限らず)生活困窮者に対して、「**生活保護で救済できる**」ことをきちんと知らせ、保護申請に来るように誘導することを、するべきである。
- (4) **生活保護制度を「扶助項目ごとに分解」**して、社会手当の形で、もっと支給しやすくする。これによって、(旧来の)生活保護の一部分を扶助することにより、生活を成り立たせ、資産のすべてを失わなくてもよいようにする。
- (5) **家賃の一部補助を進める**(これは上記(4)の扶助の一例である)。高齢者や低所得者が楽になり、若者が家庭を持ちやすい環境を作ることができる。これは、少子化対策などに有効であり、ヨーロッパ各国で成功事例がある。
- (6) **国民年金保険料の減免措置**があることを告知し、(無届の未納でなく)減免申請を薦めるべきだ。
- (7) **国民年金制度に代わる新しい制度を構築**し、老後の生活を最低限(すなわち、憲法が定める「健康で文化的な最低限度の生活」)保証するようにしなければならない。それは、現役時代の報酬に関係なく、(低収入だった人も含めて)すべての人に保障するものでなければならない。
- (8) それは結局、生活保護制度の生活扶助に相当する。それならいっそ、国民年金制度を廃止し、(上記(4)で述べたような新しい) **生活保護制度の生活扶助に一元化する**とよいのではないか。
- (9) 真に住みやすい社会を構築するために、何を選択し、何を訴えていくべきか？  
**国民がともに考え、行動していくことが必要である。**

『下流老人』(藤田孝典著、2015)に対する Amazonサイトでの読者の書評:



全82件(2016年3月): 高評価(星5-4) 多数 <====> 低評価(星1-2) 多数。

低評価の読者の意見(例)	私の感想/コメント
身勝手な人生を送って貧困になったような人も、当人の責任でなく、社会のせいになっている。	事例は身勝手な例ではないが、判断ミスはあったと、わたしは思う。人生にも社会にも沢山の落とし穴がある
個人の責任を追及せず、社会が悪いと言っている。	沢山の人がこの感想を持っています。それは、競争社会で「勝つ」ことを教えられ、「負けた者が悪い」と考えるようになっているからです。競争社会の欠陥をどう補うのか？
社会保障へのタカリを薦めており、放置すれば国が破たんする。	基本的人権の精神をどのように実現するのか、政策の問題も。
福祉は性善説だけでなく、性悪説も考慮しないと、世間は納得しない。	たしかにこれが重要点。ギリギリスのケースとタカリのケース。現在でも対処していること。
解決策は市場経済と民主主義を否定するもので、非リアルである。	今の市場経済が本当に望ましいのか(修正するべきでないか)、きちんとした社会保障こそ民主主義を実現するものでないか、とわたしは思う

## 私が考えたこと:

議論の根底の深くに、人々の心理・理解に大きな未解決のことがある。

競争社会における「勝ち負け」と「助け合い」に関わる考え方が、未解決である。

一方で、競争は、勝ち負けの世界、自己責任だという世界。  
もう一方で、助け合い、協力、生活保障、福祉を考える世界。

人々の社会的な理解において、この二つの両立が、共通の理解になっていない。

社会的思想、社会倫理として十分に解明されていないからだ。

突き詰めると、「自由」と「愛」という重要な標語に到達する。

この「自由」の考え方と、「愛」の考え方とが対立していて、  
その調整のしかたが、共通認識になっていない。(日本でも世界でも)

これは、個別事例の対立ではなく、もっともっと深い問題である。

「自由」と「愛」の対立は、実は「人類文化の主要矛盾」であり、  
その矛盾を解決することが、「人類文化の主要課題」である。

# 「自由」vs.「愛」: 人類文化を貫く主要矛盾

中川 徹、TRIZホームページ、論考、2016年 4月22日

## (1) 人類の文化は、「自由」を第一原理とし、その伸長を主要目標とします。

各人が、自分で判断し、行動し、「生きる」ことです。

「自由」は、(自然的、社会的な)「競争」に「勝つ」ことを目指します。

一人の「自由」と他者の「自由」とは、必然的に衝突します(矛盾します)。

## (2) 人類の文化は、「愛」を第二原理とし、その普遍化を主要目標とします。

各人が、その子を愛し、家族を愛し、隣人を愛して、「助け、守る」ことです。

「愛」は、「自由」を自制して、「自由」同士の衝突を無くすことを目指します。

「愛」は、自分の周りの「身内」を助け・守るために、  
「外」からの攻撃に対抗する性質があります。

それは、「身内」を一つの社会的主体と考えると、  
一つ上のレベルでの「自由」と「競争」を出現させます。

- (3) 人類の文化は、  
「自由」と「愛」という、しばしば対立する(矛盾する)二つの原理を、  
どのように両立させ、使い分けつつ発展させていくかを、  
問い続けてきました。

「自由」vs.「愛」を、  
本稿で、「人類文化の主要矛盾」と名付けました。

- (4) この「自由」と「愛」との両方を包含して動機づけ、その間の調整を行う  
指針として人類文化が獲得してきたのは、「倫理」でしょう。

平たく言えば、「人の道」、「良心」です。

「倫理」の根幹部はすでにDNAに埋め込まれていると考えられますが、  
当たり前すぎて、明示することが難しい面があります。

「**基本的人権**」の概念は、この「倫理」[の一部] が明確化されたものといえます。

(5) 人類は、その文化の歴史の全体を通して、  
この「自由」と「愛」という「主要原理」の伸展と、  
「自由」vs.「愛」という「主要矛盾」の解決に取り組んできたといえます。

さまざまな社会組織、社会システムを形成した。

(経済、政治、・・・)

高度な文化を生んだ

(言語、宗教、社会思想、科学技術、芸術、・・・)

「自由」vs.「愛」の「主要矛盾」は、歴史を通じて解決されてきているか？

==> 一部 YES. 解決の考え方や事例がいろいろできた。

==> NO. (解決する考え方・事例はあっても)

「主要矛盾」は至るところに在り、生まれ、深刻化している。

「主要矛盾の解決」という問題は一層複雑化・大規模化し、困難を生じている。



(6) 「人類文化の主要矛盾」の解決を困難にしている理由:

- (a) 最も基本の個人(間) のレベルで、  
「自由」、「愛」、「倫理」のありかたが明確でない。(知性と規範のレベル)  
人間性における「欲」「悪」「(原)罪」の問題も。(人間性の本質のレベル)  
人々が出生以来のさまざまな体験で考えが形成・制約される。(環境・教育)  
人々が、知性よりも感情で動かされる。(感情のレベル)
- (b) 種々の社会組織における「自由」、「愛」、「倫理」のありかたが明確でない。  
グループ、組織(企業、政党など)、地域共同体、国 など。  
これらのありかた(社会的「倫理」)の理解が世界的に共有されない。
- (c) 個人や組織が自己の利害(「自由」)を主張して、(社会的)「倫理」に  
反する行動をとり、それが社会的な「勝者」になることがある。  
社会的「勝者」が、自分に都合がよい社会システムを構築する。
- (d) (c)の状況が、小さいものから大きなものまで至る所にあり、かつ、  
歴史的な積み重ねをもっている。  
(いつの時代でも) 社会システムが(社会的)「倫理」に合わない面がある。  
いままで虐げられていた人々が(c)の行動をとり、対立・闘争が起こる。



(7) 今後すべきこと:

上記(6)の (a) ==> (b) ==> (c) ==> (d) の順に考察を進める。

特に(a) 個人(間)のレベルでの考察が大事。

非常に大きな問題である。

前途遼遠であるが、

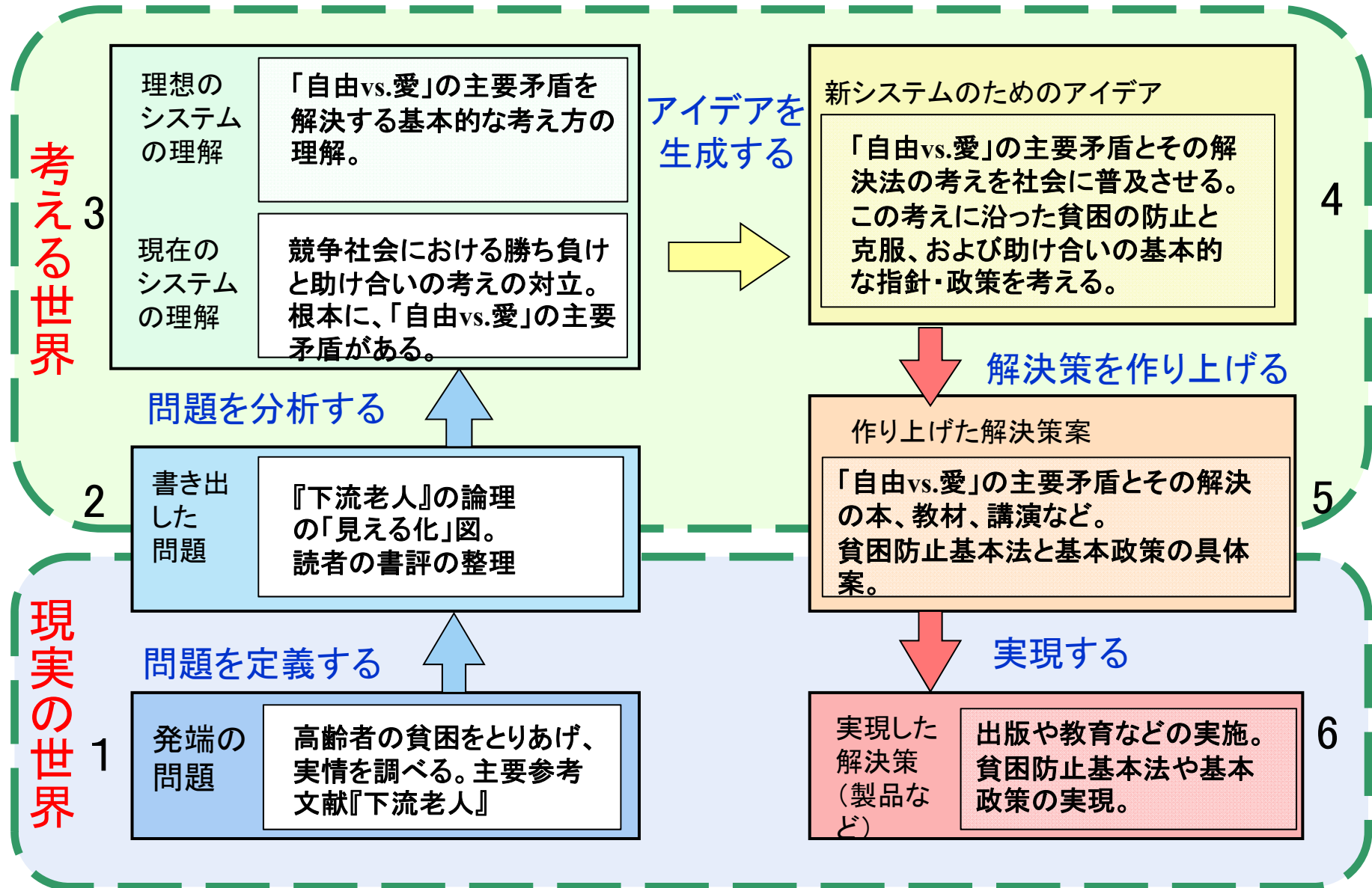
それを考察すると、将来の、広範囲の問題に指針を与える。

本件は、「矛盾を認識し、その解決を図る」というTRIZの思想が活用された。

考察の過程は CrePS の考え方でガイドされている。

# 「6箱方式」で整理する：「日本社会の貧困を「見える化」して考える」

中川 徹 (2016)



## まとめ:

本研究は、輻輳した社会的な問題に、  
TRIZ／CrePSを使ってアプローチした最初の報告である。

「日本社会の貧困」の問題をとりあげた。

藤田孝典著『下流老人』を原典に選んで、その論旨を「見える化」した。  
また、同書へのカスタマーレビューを批判的に分析した。  
ここから、人々の意識の根底に未解決の問題があることを認識した。

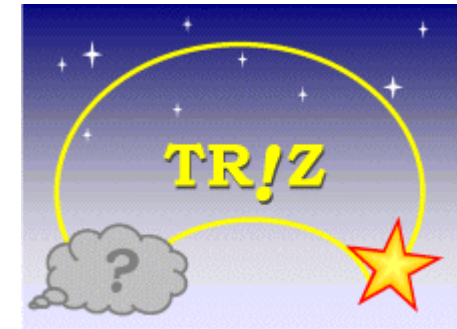
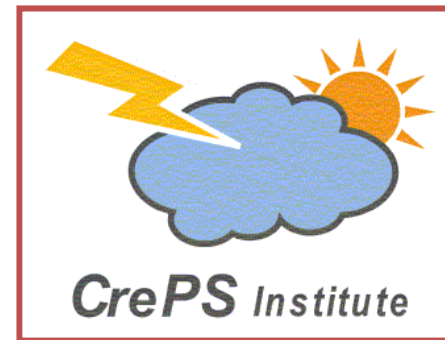
「自由」vs.「愛」が人類の文化を貫く「主要矛盾」として認識した。

人類文化は、「自由」を第一原理とし、「愛」を第二原理とするが、  
「自由」同士、「愛」同士、「自由」と「愛」間に、葛藤・対立がある。

この主要矛盾を解決することを人類文化は努力してきたが、  
ますます困難になっている面がある。その要因を考察した。

今後、この「主要矛盾」の解決の基本的な考え方を明確にし、  
それによって、福祉、貧困の解消、社会の方向づけを見出していく。

以上、TRIZ／CrePS が 社会的問題にも独自の重要な寄与をすることを示した。



ご清聴 ありがとうございます

中川 徹 (大阪学院大学 名誉教授)  
nakagawa@ogu.ac.jp

『TRIZホームページ』(和文・英文) 編集者  
<http://www.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/>

クレプス研究所 代表 『TRIZ 実践と効用』シリーズ 出版